

# ～ J.S.バッハ『無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ』全曲演奏～ 可能性を広げていろいろな曲に挑戦したい

横浜バロック室内合奏団でコンサートマスターを務めるヴァイオリニスト小笠原伸子さんがバッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ全6曲を演奏するリサイタルを開く。作品に取り組む意気込みをうかがった。

## ヴァイオリニスト 小笠原 伸子さん

### バッハの無伴奏を全曲演奏

「無伴奏の全曲演奏は三十歳くらいの頃からやってみていた、と考えていましたが、気が付いたらもう二十年経ってしまっていました(笑)。今年はちょうど五十歳になるので、その記念もあるし、とにかく思い立ったらやってみよう、という感じですね。

これまでに、一つのコンサートで四曲取り上げたことはあるのですが、全部演奏するのは今回が初めてです。二時間の演奏会にちょうどきれいにまとまります。

バッハの無伴奏はヴァイオリニ

ストにとっては欠かせない作品です。私も中学生の頃から弾いていて、いろいろな本番で演奏してきました。長年この曲を弾いていますが、歳と共に曲の見方も随分と変わってきました。最近では古楽が盛んになりましたし、バロック・ヴァイオリンのレッスンを受けると、また全然違った見方と出会います。

また、この作品は何回弾いても完璧に弾けたという思いがなかなか持てない作品なんです。何故そのように思うのかを考えていたのですが、バッハの頭の中で鳴っていた音の数は本当はもっとたくさんあって、その一部分しか弾いていないからではないか、と最近思うようになりました。

バッハは元々鍵盤楽器の奏者ですから、この作品も本来は鍵盤楽器のための音楽がまず先にあって、本当は頭の中にもっとたくさん音があり、その一部分をヴァイオリンのために書き下ろしていたのではないのでしょうか。」

——ご自身がこだわっ

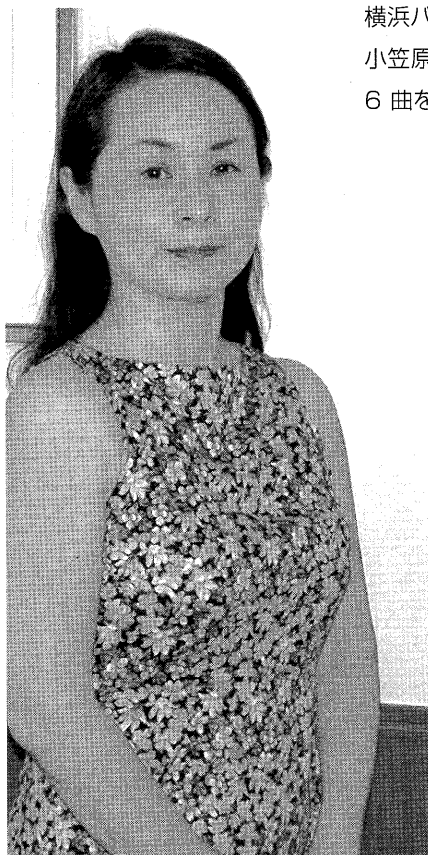
て演奏したいところは？」

「四声部を一度に弾いたりしますので、自分自身の中でそうとう声部がきちんと聴こえていないと演奏できません。そういったところを全部聴こえるようにして弾きたい、と努力しているところです。

ヴァイオリンの場合はバス・パートが書かれていない曲が多いですけど、例えばソナタの一番のフーガはオルガン曲に、二番は全く同じ曲がクラヴィア曲に編曲されていますので、そういうものを参考にして、自分の中でバス・パートを構築していきたいな、というのがありますけれども、なかなか難しいですね。

それから、バッハの曲はアンサンブルをすると躍動感があつて非常に楽しい曲がたくさんありますので、そういう雰囲気も一人ですら表現できるかというのも課題ですね。一人で表現するので、とても忙しいのですが(笑)。

この作品は音もかなりたくさんありますので、ヴァイオリニストにとって難しいレパートリーではあるのですが、それを楽しく弾けるようなところまで、いつかは到達したいと思っています。今回の演奏会はそのスタートにしたいです。」



## 自筆譜から見えてくるもの

——一つ一つ緻密に練習すると、とても時間の掛かる作品でしょうか？

「そうですね。一回弾いても結局よく分かりませんから、何回も弾いてみます。ところがそれでも分からない部分がたくさんあるのです。」

本当に弾き込んで、ようやく見えてくることもありますし、バッハの自筆譜を『これはどういう旋律だろう』と眺めていると、印刷譜では見えてこない部分、例えば音楽の大きな流れが見えてくる、ということもあります。

自筆譜もわりと奇麗な状態で残っているのですが、やはりこれは何の音なのだろう、と思うところもあります。その『何の音だろう』という部分も古楽の演奏家は拾い上げて演奏している場合があります。

そういった新しい解釈のCDなどもわりとたくさん出ていますし、以前よりも、たくさんさんの演奏家がこの曲を取り上げるようになりました。そういう意味では無伴奏の研究も進んできたのだと思います。

練習に関しては、フーガは難しいですけれども楽しいです。とにかく

楽しくて飽きないですね。それがとても不思議に感じます。

たくさんさんの人数で演奏するフーガも楽しいのですが、自分一人でそれだけ多彩な要素が含まれているフーガを演奏して楽しめるというのは、練習していても実は楽しいんです。周りから見ると何て難しいゴチャゴチャした曲を弾いているんだらう、というように感じるかもしれないませんが、私自身は時間が許せば何時間練習していても飽きないです。」

——ご自身は、この作品にどのようなイメージをお持ちですか？

「やはり、バッハという人は当時教会でオルガニストとして演奏していたわけですから神とは切っても切れない関係にあります。ですから、弾いているとそういった厳粛な世界に導かれるのはたしかですね。」

この作品は基本的には対位法の音楽ですけれども、バッハの作品の場合にはハーモニー感というのでしょうか、音が一つ変わると調性がどんどん転換され、ハーモニーがかわって、限りなく発展していくという即興性と強烈な個性とがあります。他の作曲家にはない変化の多様性があると思うのです。あつと言う間に変化して、人の心を捕らえて飽きさせ

ないような多彩性にひかれていきます。」

——かなりたくさんさんの重音ができてますが、音程はどのように？

「音程は難しい問題です。追求していったら切りがないところもあります。開放弦がある程度使って弾くわけですから、私は開放弦を基準にとっています。開放弦の音の高さに標準を合わせながら中和させていくのです。」

——このコンサートに来てくださる方に特に聴いてほしいところは？

「先程も言ったバッハの音楽の多彩性を楽しんでいただけたら、と思います。ヴァイオリン一本での演奏ですが、想像力を働かせて見えない楽器、声部を聴いていただくのも面白いかもしれません。」

気が付いたときには  
ヴァイオリンを手にしていた

——ところで小笠原さんがヴァイオリンを始めた頃を振り返っていたのですが、

「ヴァイオリンは四歳のときに始めました。気が付いたらヴァイオリンを弾いていましたから、たぶん親がやらせたかったのだと思います。」

親は戦争世代ですが、女の子も自立できるように手に職を、という考えでやらせたのではないのでしょうか。

当時、私にとってヴァイオリンの存在は、やはり子供ですから、練習しなければいけないし、練習する時間は遊べないし、という感じでした(笑)。

本当は、わりとボーっとしながら空想するのが好きだったんですね。とにかく本が好きで、外国の童話とか、空想の世界のお話を好んで読んでいたんです。音楽も同じですね。弾いているうちにどこか想像の世界に飛んでしまうというところがあります。そんな感で、あまり深くは考えずに楽しく弾いていたのだと思います。

そうこうするうちに小学校二年生のときに、現在のジュニア・フィルハーモニック・オーケストラの前身である、朝日ジュニアオーケストラに入りまして、そこでアンサンブルの楽しさを初めて知りました。

それから、十歳のときにNHKテレビで放送されていた江藤俊哉先生の『バイオリンのおけいこ』に出演したのです。そのとき江藤先生はアメリカから帰国されたばかりで、本当に美しい音色をお持ちでした。そ

## 自筆譜から見えてくるもの

——一つ一つ緻密に練習すると、とても時間の掛かる作品でしょうか？

「そうですね。一回弾いても結局よく分かりませんから、何回も弾いてみます。ところがそれでも分からない部分がたくさんあるのです。」

本当に弾き込んで、ようやく見えてくることもありますし、バッハの自筆譜を『これはどういう旋律だろう』と眺めていると、印刷譜では見えてこない部分、例えば音楽の大きな流れが見えてくる、ということもあります。

自筆譜もわりと奇麗な状態で残っているのですが、やはりこれは何の音なのだろう、と思うところもあります。その『何の音だろう』という部分も古楽の演奏家は拾い上げて演奏している場合があります。

そういった新しい解釈のCDなどもわりとたくさん出ていますし、以前よりも、たくさんさんの演奏家がこの曲を取り上げるようになりました。そういう意味では無伴奏の研究も進んできたのだと思います。

練習に関しては、フーガは難しいですけれども楽しいです。とにかく

楽しくて飽きないですね。それがとても不思議に感じます。

たくさんさんの人数で演奏するフーガも楽しいのですが、自分一人ですらだけ多彩な要素が含まれているフーガを演奏して楽しめるというのは、練習していても実は楽しいんです。周りから見ると何て難しいゴチャゴチャした曲を弾いているんだらう、というように感じるかもしれないですが、私自身は時間が許せば何時間練習していても飽きないです。」

——ご自身は、この作品にどのようなイメージをお持ちですか？

「やはり、バッハという人は当時教会でオルガニストとして演奏していたわけですから神とは切っても切れない関係にあります。ですから、弾いているとそういった厳粛な世界に導かれるのはたしかですね。」

この作品は基本的には対位法の音楽ですけれども、バッハの作品の場合にはハーモニー感というのでしょうか、音が一つ変わると調性がどんどん転換され、ハーモニーがかわって、限りなく発展していくという即興性と強烈な個性とがあります。他の作曲家にはない変化の多様性があると思うのです。あつと言う間に変化して、人の心を捕らえて飽きさせ

ないような多彩性にひかれていきます。」

——かなりたくさんさんの重音ができてますが、音程はどのように？

「音程は難しい問題です。追求していったら切りがないところもあります。開放弦がある程度使って弾くわけですから、私は開放弦を基準にとっています。開放弦の音の高さに標準を合わせながら中和させていくのです。」

——このコンサートに来てくださる方に特に聴いてほしいところは？

「先程も言ったバッハの音楽の多彩性を楽しんでいただけたら、と思います。ヴァイオリン一本での演奏ですが、想像力を働かせて見えない楽器、声部を聴いていただくのも面白いかもしれません。」

気が付いたときには  
ヴァイオリンを手にしていた

——ところで小笠原さんがヴァイオリンを始めた頃を振り返っていたみたいです。

「ヴァイオリンは四歳のときに始めました。気が付いたらヴァイオリンを弾いていましたから、たぶん親がやらせたかったのだと思います。」

親は戦争世代ですが、女の子も自立できるように手に職を、という考えでやらせたのではないのでしょうか。

当時、私にとってヴァイオリンの存在は、やはり子供ですから、練習しなければいけないし、練習する時間は遊べないし、という感じでした(笑)。

本当は、わりとボーっとしながら空想するのが好きだったんですね。とにかく本が好きで、外国の童話とか、空想の世界のお話を好んで読んでいたんです。音楽も同じですね。弾いているうちにどこか想像の世界に飛んでしまうというところがあります。そんな感で、あまり深くは考えずに楽しく弾いていたのだと思います。

そうこうするうちに小学校二年生のときに、現在のジュニア・フィルハーモニック・オーケストラの前身である、朝日ジュニアオーケストラに入りまして、そこでアンサンブルの楽しさを初めて知りました。

それから、十歳のときにNHKテレビで放送されていた江藤俊哉先生の『バイオリンのおけいこ』に出演したのです。そのとき江藤先生はアメリカから帰国されたばかりで、本当に美しい音色をお持ちでした。そ



## 小笠原 伸子 ヴァイオリンリサイタル

ヨハン・セバスティアン・バッハ  
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ  
無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ  
全6曲

2004年9月13日(月)19時開演 横浜みなとみらいホール小ホール  
全席指定: 3,000円

お問い合わせ: 横浜パロック室内合奏団事務局 TEL. 045-222-9681

●おがさわら: のぶこ: 東京芸術大学付属高校を経て、同大学、同大学院終了。在学中よりリサイタル、室内楽演奏会を開催し、独奏者、室内楽奏者として活動。1979～87年神奈川フィルハーモニー管弦楽団に在籍、コンサートマスター、アシスタント・コンサートマスターを歴任した。1981年横浜弦楽四重奏団を結成し、横浜を中心に地域に根ざした演奏活動を行なう。1991年には、横浜パロック室内合奏団を結成し、コンサートマスター、プロデューサーとして活動。1983年より自宅にて「たかとりホームコンサート」を主催。1978、79年イタリア・シエナ・キジアーナ音楽院にてS・アッカルドに師事。2001年にはウルビーノの古楽コースにて、パロック・ヴァイオリンをエンリコ・ガッティに師事。

だんだんと忙しくなっていくたので  
す。

やはりオーケストラというのはと  
にかくスケジューリング的にも大変です  
からね。その後、私自身の演奏活動  
に専念することにしました。」

### 横浜パロック室内合奏団

——ご自身が起ち上げられた横浜パ  
ロック室内合奏団では毎回趣向を凝  
らしたプログラミングを作っていま  
すね。

「横浜パロック室内合奏団を始め  
てから十三年になります。

プログラムを組むにも運営面のご  
とも考えなければなりませんし、演  
奏したい曲はたくさんあるのですが、  
実際に楽譜が手に入らないものが多  
いんですね。ですから、まずは楽譜  
集めを自分だけにするのではなく、  
いろいろな方にもお手伝いをお願い  
して、その中からプログラムを組ま  
なければなりません。」

——日本ではなかなか手に入らない  
貴重なものもあるわけですね?

「ええ、ただ今ではインターネッ  
トで海外のものも楽に手に入るよう  
になりました。

私の場合は各出版社が出している  
カタログをみて、海外に行ったとき

に直接買ってくることも多いので  
すが、ネットで注文する場合もありま  
す。また、代理店と言いますか、仲  
介してくださる方にお願ひすること  
もあります。

バロック時代に限ってみても弦楽  
合奏の曲の数は膨大です。年に四回  
の定期では、とてもやり尽くすこと  
はできません。」

### 踏み込んでいないジャンルに挑戦

——今後の抱負は?

「とにかくヴァイオリンが心から  
好きなので、これからもずっと弾き  
続けていくことには変わりありませ  
ん。バッハの無伴奏に関しては、毎  
年継続していきたいと思っています。

横浜パロック室内合奏団では、と  
にかく可能性を広げて、いろいろな  
曲に挑戦したいですね。まだまだ踏  
み込んでいないジャンルがあるので、  
広がっていきたくと思っています。新  
しい作品もそうですけれども、古い  
作品も、例えば中世の作品で弦楽器  
で演奏できるものがあつたら取り上  
げてみたいです。

バロックに関してはまだまだ作品  
がたくさん残っているのです、順番に  
取り上げていきたくと思っています。  
」

(取材/日)